

せ 前例のないことに失敗はない

研修や何かでまちづくりの取組を話すことがあるが、ときどき「失敗した事例を教えてください」という質問をいただくことがある。正直、この手の質問はあまり好きではない。まちづくりプランナーとしてのプライドが失敗事例を話すのをためらわせるといふことではない。確かに失敗事例を学んでおけば同じような失敗を回避できる可能性はある。ただ、私が入るようになるのは失敗しなければまちづくりはうまくいくかと言うと、そうではないということだ。

まちづくりに定式があるのであれば、それからできるだけ外れないようにすれば良いのだが、まちづくりは、そのまちそのまちの環境や社会構造が異なり、まちづくりの課題も他と似たように見えても異なる。そうなるは今までの経験にだけ頼るのではなく、そのまちならではの新しいチャレンジが求められるのだ。言わば前例のない取組にあえて臨まなければならぬことになる。前例のない取組は常に不安で緊張させられる。取組をすすめるうちに何が起きてくるのか予想がつかないこともある。

ただ、一方で前例のないことはチャレンジする価値があると思っている。そこには「失敗」ということが無いからだ。前例が多くあることに取組むと、どうしてもその前例と比較してうまくできたか、できなかったかという評価になる。前例をとおして、こういう取組をしたら、こういう成果が生まれるという評価の尺度がすでにできあがっていて、それに当てはめて、ああだこうだ言われる。まちづくりは決して同じ状況は無いのだからと言っても言い訳に聞こえてしまう。

それに対して、前例のないことに「失敗」はないのだ。当初想定した成果に到達しないこともあるが、それは必ずしも失敗と言いつてもいい。課題に対して熟考してチャレンジした取組は、何かしらまちへの変化をもたらす。そして、その変化がまちにとってどのような意味をもたらすのかは、しばらく時間をおいて見なければならぬ。と、自分に言い聞かせられる。前例のないことにチャレンジした体験は貴重だ。自分なりの新たな方法論が生まれ、課題に対応する幅も広がる。定式のないまちづくりはだから面白いとも言える。